

事業名	令和6年度ワカメ養殖概況(増養殖技術研究)
予算区分	県単
事業実施期間	平成12年度～
担当者	(環境増養殖担当) 棚田教生、井口悠稀
共同研究機関等	

<目的>

令和6年度の徳島県内のワカメ養殖概況及び種苗の有償配布状況についてとりまとめる。

<結果>

種苗生産～育苗

10月中下旬から11月上旬にかけての育苗期は記録的な高水温となった(図1)。育苗開始目安の23℃を下回ったのは、小鳴門海峡に面する水産研究課鳴門庁舎の汲み上げ海水(10時観測値、底層)で11月3日、鳴門庁舎前の試験筏に設置したリアルタイム水温計(表層)でも11月3日といずれも11月に入ってからとなった。鳴門庁舎汲み上げ海水の水温は1973年から観測を継続しているが、本年の11月3日は観測史上最も遅い日となった。その後も12月上旬まで平年より高い水温が続いたため、育苗の進捗が遅れた。その結果本養殖用種苗の生産(配布)時期は大きく遅れたものの、生産現場で種苗不足に陥る事態にはならなかった。

本養殖

秋期の特異的な高水温や食害に伴う育苗の遅れから、播磨灘の北灘沿岸では例年より大きく遅れて種付け作業が開始された。粟田地区では11月20～21日に開始した人が多く、最も早い人でも11月17日であった。このため11月中に種付けが終了せず、12月初旬までかかった漁業者もいた。紀伊水道沿岸の漁場では例年通り11月20日頃から順次開始されたが、種苗の供給量が追いつかず12月まで種付け作業をする漁業者が多かった。

鳴門地区の海水温は、12月中旬以降は平年より低めに転じ、特に2月から3月にかけての収穫盛期には特異的な低水温となった(図1)。鳴門庁舎の汲み上げ海水温(底層)は2月19日、25～26日に最低水温7.7℃、鳴門庁舎前の試験筏での実測値(水銀温度計、表層)では2月23日に7.9℃(2月24日～3月1日は未調査)、試験筏のリアルタイム水温計(表層)では2月25～26日に7.3℃を記録した(22～24日は欠測)。これらの結果から今漁期は期間中の最低水温が7℃台まで低下したことがわかり、温暖化が進行する近年では特筆すべき現象であった。

食害

小鳴門海峡の鳴門庁舎前試験筏では例年と同様に12月から1月にかけてクロダイによる食害が発生した。他の地区でも食害はあったが、一昨年のような深刻な状況には至らなかった。

色落ち

小鳴門海峡のDIN濃度は近年になく高い水準で維持され、3月末までワカメの色落ちラインとされる2μM/Lを下回ることにはなかった(図2)。播磨灘と紀伊水道北部海域でも概ね2μmol/L以上で推移し、鳴門地区では色落ちの発生はほぼ見られなかった。一方紀伊水道南部海域では12月中旬から3月末まで概ね2μM/L以下で推移し、特に1月中旬から2月下旬にかけては平年を下回る貧栄養環境となったため、2月には色落ちが発生した。

生長・品質及び生産量

12月上旬までの高水温により種付けの開始時期や初期の生長の遅れはみられたが、それ以降

の水温は例年よりかなり低く推移し、また栄養塩環境も一定の水準で維持されたことから、鳴門地区では全体的に近年にない豊漁年となった。一方紀伊水道南部の主力漁場である和田島地区では生育不良が終盤まで継続し、鳴門地区とは対照的に不漁年となった。

ワカメ種苗の有償配布

平成 30 年度より、水産研究課が開発した高水温耐性株（鳴門椿）の配偶体を有償配布しているが、今年度より従来の「鳴門椿」に加え、色調面を改良した「新鳴門椿」の有償配布も開始した。鳴門椿を 2 漁協の計 5 名、新鳴門椿を 1 漁協の 10 名の合計 15 名に配布した。

<次年度の計画>

継続する。

<結果の発表・活用状況等>

特になし。

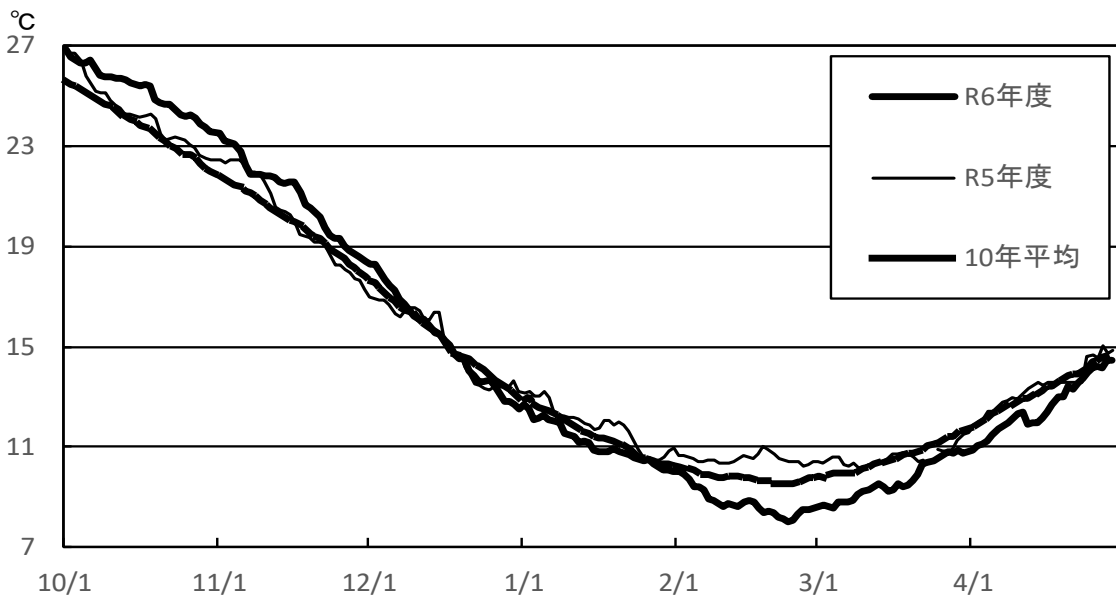


図 1.水産研究課鳴門庁舎（小鳴門海峡）の汲み上げ海水温（日平均値）の推移

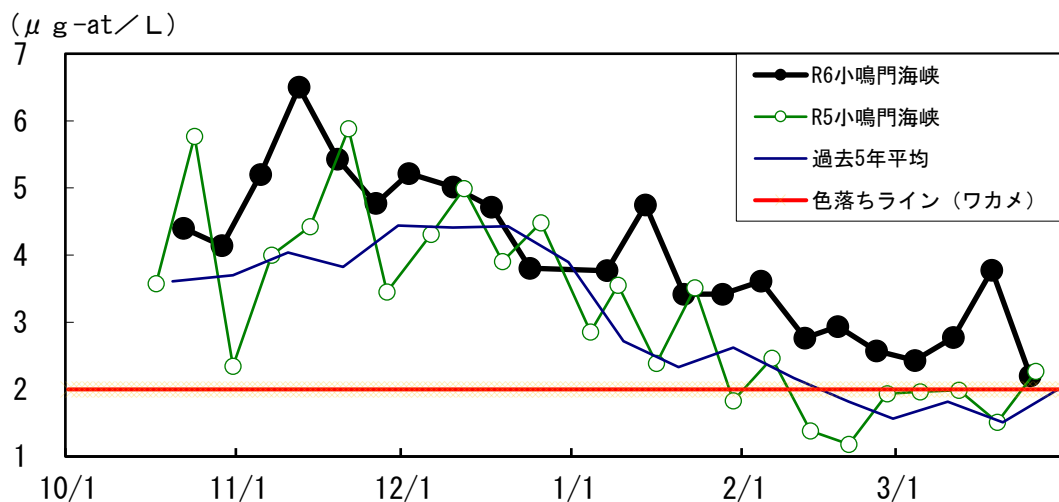


図 2. 小鳴門海峡における DIN 濃度の推移